属人区長の書簡 (2008年12月)

近くに迫った降誕祭は、「なりと話にないのと話にないのというではいる」ではいる。とれるといる。といるといる。といるといるがはがない。といるにはいるがはいる。といるがはいる。といるではいる。といるではいる。といるではいる。といるではいる。といるではいる。

2008/12/29

愛する皆さん、イエスが私の娘たち と息子たちをお守りくださいますよ うに!

オプス・デイ属人区設立25周年にあたり、聖母を通して神に感謝を捧げてきたオプス・デイのマリア年が幕を閉じました。慈しみ深い主のお陰で、私たち皆が、聖母に対する愛情と信心を深めたと同時に、御子イスと親密で個人的な友情を固め、エスと親密で個人的な友情を固めたことと思います。

今、私たちは無原罪の御宿りの大祝 日を準備していますが、この着されていますが、この 信心を心奥底により堅く定心を る新たな機会です。この信心は のでありなものでありませた ないでは創立者のです。 思いでは自分を何かりませ でした。 唯一、 模範にすべき にすべき ルはイエス・キリストだと繰り返し ておられました。しかし、はばかり なく「皆さんに、私から倣って欲し いことがあるとするならば、それは 聖母に対する私の愛です | とも断言 されていました。聖母に対して何と 強い、子としての愛情を持っておら れたことでしょう。12月8日の大祝 日を準備している今、私たち一人ひ とりが聖母信心と使徒職の熱意を育 み続けることができるように、創立 者の取り次ぎにより頼みましょう。 周りの人たちにも、聖母との信頼に 満ちた対話を通して、内的生活の道 を見つけ、あるいはその道を前進す るよう、励ましを与えましょう。

昨日、待降節が始まりました。対神 徳である希望を深める絶好の典礼節 です。この徳によって私たちは、主 が神のみ旨を果たす人々に約束され た永遠の幸せを、全力を挙げて望む よう促されます。教皇様はちょうど 一年前にこう書かれました。「私た

ちは日々を歩んでいくために、小さ な希望から大きな希望まで、なにが しかの希望を必要としています。し かし、私たちは偉大な希望がなけれ ば満足できません。この偉大な希望 は、他のあらゆる希望を超えたもの でなければなりません。この偉大な 希望は、神以外にあり得ません。神 は全宇宙を包み、私たちが自分だけ では手に入れることのできないもの を私たちに与えて下さるからで す。| (ベネディクト十六世、2007 年11月30日回勅『希望による救い』 31)

それゆえ、天国への希望を再確認し つつ、この典礼節を始めることにしまう。この世のことだけを目のことだけをすることなく、私たちが手にすることのできる全てのことを、て国を進むための手段とし最終しまり。私たちの人生の最終に神を所有し、永遠に神を所有し、のうちに憩うことです。ここに、 日々目指すべき決定的な目標があるのです。ですから、私たちは、全てのことを 一自分のために何も保留せず完全に全てを一 神の王国に仕えるために使わなければなりません。

『カトリック教会のカテキズム』 は、待降節の意味を次のように要約 しています。「教会は毎年、待降節 の典礼を行いながら、メシアへの待 望を再現します。キリスト者は救い 主の最初の来臨に向かう長期の準備 に心を合わせながら、再臨への熱い 待望を新たにするのです。| (『カ トリック教会のカテキズム』524) クリスマスを準備する期間です。そ して、牛者と死者とを裁き、「神が 全てにおいて全てとなられる | (1 コリント15.28)終わりのない神の国 を築くため、時の終わりに実現され る贖い主の再臨への希望を強める時 期です。

待降節の前半、12月16日までは、主 の再臨についての考察が中心です。 何よりも毎日曜日のミサ聖祭におい て、旧約と新約の両聖書から、最終 的な主との出会いを準備するために 相応しい場面が提示されます。12月 17日からは、朗読の内容が、間近に 迫ったクリスマスにおけるイエス・ キリストの霊的来臨に備えるよう促 すものに変わります。この二点は緊 密に一致しており、12月中、このこ とを中心に祈ることができます。こ の地上においても神と共にいたいと いう熱望を抱いていますか。起こる 出来事の中に神の御顔を求めていま すか。主は全ての人のために、すで に来られ、またこれから来られると 確信して、平和を失うようないかな る事柄も避けるようにしています か。

四終、つまり世の終わりの時に起こる「最後の事柄」と、その前に一人 ひとりに起こる死ぬことについて考 えることが、恐れや不安の元になってはなりません。教会がこれらの真理を提示するのは、そのためではなく、全く別のことのためです。それは、何よりも一人ひとりが責任を持ち、自己の聖化と使徒職において間断なく働くことを決意するためなのです。

ベネディクト十六世は、数週間前 に、四終についての聖パウロの教え を取り上げ、このテーマに関わる私 たちの信仰の大いなる確実性の三つ の側面について黙想するよう、キリ スト者にお勧めになりました。第一 に「イエスが復活し、父と共におら れ、そこから、永遠に私たちと共に おられることを確信しています。キ リスト以上に力のある方はいませ ん。(…) だから私たちは安心し て、恐れを抱きません。| (ベネ ディクト十六世、2008年11月12日一 般謁見演説)

世を救おうと御子を世に送られるほ ど、多くの、かつ明らかな形で私た ちへの愛をお示しになる父なる神 を、どうして恐れることがありえる でしょう。復活されたキリストへの 信仰こそが、あらゆる恐れへの対抗 手段となるのです。福音宣教の最初 の時代、行く末に対する破滅的な恐 れに満たされていた世界で、そうで あったのでした。そして、現代、多 くの人が将来に不安を抱いたり、あ るいは全てがこの世限りのものであ るかのように無責任な振る舞いをし たりしているこの世界においても、 再現されなければならないことで す。聖ホセマリアは「主は私の光、 私の救い、誰を恐れよう(詩編 27,1) 」と詩編の言葉で自問し、こ う答えています。「天の御父とこの ように親しくできるのですから、誰 にも、何に対しても、恐れなど抱い て欲しくないのです。」(聖ホセマ リア、『神の朋友』95)それゆえ、 こう言い加えられました。「神の子

なら、生命も死も恐れない。神の子としての精神が内的生活の基礎となっているからである。神は私の父であり、全ての善の創り主、全そのものであらせられると考えているからである。」(聖ホセマリア、『鍛』987)

教皇様は、キリスト教の楽観主義の 理由を掘り下げ、話しを進められま した。「第二の態度は、キリストが 私と共におられることへの確信で す。キリストのうちに来世はすでに 始まっています。このことが確かな 希望をもたらします。未来とは、だ れも方向を知ることのできない暗闇 ではありません。未来とは、決して そのようなものではありません。| (ベネディクト十六世、2008年11月 12日一般謁見演説)キリストを信 じ、キリストによって生かされてい る人にとって、未来はいつも輝いて おり、確実なものです。復活された イエス・キリストが、善き牧者とし

て、私たちに永遠の命への小道を拓 き、私たちと共に歩み、母として父 としての愛情で私たちを見守り、育 んでおられるからです。一人ひとり が次の聖書の言葉を、真に自分のも のとすることができます。「主は羊 飼い、私には何も欠けることがな い。主は私を青草の原に休ませ、憩 いの水のほとりに伴い、魂を生き返 らせてくださる。主は御名に相応し く、私を正しい道に導かれる。死の 陰の谷を行くときも、私は災いを恐 れない。あなたが私と共にいてくだ さる。あなたの鞭、あなたの杖、そ れが私を力づける。」(詩編 23.1-4)

キリスト者を支える三つ目の確実性はこれです。「再臨する裁き主一この方は、裁き主であると同時に、救い主でもある方です— は、ご自分の生き方に従ってこの世を生きるようにという務めを私たちに残しました。この方は私たちにご自分のタラ

ントンを預けました。それゆえ、第 三の態度は、世と、キリストにおける兄弟に対して責任をもつことです。そして、同時に、キリストの憐れみを確信することです。この二つの態度は共に重要です。」(ベネディクト十六世、2008年11月12日一般謁見演説)

この責任感は、negotiamini, dum venio (ルカ 19,13) 私が帰ってくる まで、これで商売をしなさい、とい う主のみことばに呼応しています。 聖ホセマリアは、神が常に共にいて くださることを確信し、主の遺産を 託されたものとしての責任を持っ て、このみことばを度々黙想しまし た。神の恩恵によって、いつの日か 私たちも永遠の至福に与ることがで きるように、時間を活用しなければ なりません。創立者のもう一つの言 葉を味わうことにしましょう。「時 間潰しが本業であるかのごとき毎日 を送るとすれば、人生は何ともった

いないことでしょう。時間とは神か ら授かる宝ですから、このような態 度に弁解の余地はありません。

(…) 多少の差こそあれ神が人々に お与えになった能力を、人々と社会 に貢献するため、充分に発揮しない とすれば何と残念なことでしょう。 キリスト信者でありながら時間を 《潰す》なら、天国を《潰す》危険 を冒すことになります。自らの殻に 閉じこもり、逃避し無関心になるな らば。ところで、神を愛する人は自 己の所有物のみならず、自分自身を も捧げます。| (聖ホセマリア、

『神の朋友』46)

この勧めに導かれて自問することが できるでしょう。個人的な資質や関 わっている仕事、日々、遭遇す る善 を行う機会などの様々なタラントン を、自分の心と生活環境にキリスト の王国が確立するために活用するべ きだという責任を感じていますか。 私の模範、私の言葉を通じて、人々

も同じように振る舞うよう助けていますか。法律や社会組織において神 法が尊重されるよう、できる限りの ことを全て実行していますか。

待降節の後半は、最初に思い起こし てもらったように、直接クリスマス の準備に向けられています。この 間、創立者の勧めに従って、ベツレ ヘムに向かわれる聖母と聖ヨセフに 付き添いましょう。個人的な祈りの 時間、そして一日中、お二人のお側 近くで、進んで何かの手伝いをし、 今もそうであるように、この世にお 出でになる神の御子をお迎えするこ とを知らなかった当時の人たちのた めに、償いを捧げましょう。これは 単なる空想ではなく、受肉の秘義に 対する信仰を具体的に表す方法で す。

クリスマスは、私たちにとって素晴らしい学び舎です。イエスが私たちに与えられる教えを活用しましょ

う。創立者が思い起こさせてくだ さったように、その自然なご降誕の 様子を眺めてみましょう。「普通の 人間と全く変わりなく、御母の胎内 に九ヶ月間とどまっておられまし た。人類が是非とも主を必要として いることを余りにもよくご存じでし た。それゆえ、人類を救うために地 上に来ることを切望しておられまし たが、時間を縮めたりなさらなかっ たのです。人間がこの世に生まれる 時のように、来るべき時においでに なりました。」(聖ホセマリア、 『知識の香』18)

また、その素朴さも考察できます。 「主の来臨に壮麗さはなく人知れぬものでした。地上ではマリアとヨセフのみが神の冒険 —御計画— に与るのです。そのあとで、天使に知らされた羊飼いたち、もっと後に東方の賢人たちも訪れます。天と地、神と人とを結びつける重大な出来事 は、このようにして起こったので す。」(同上)

神なる師にきっぱりと倣うことで、 私たちも普段の生活において、神的 なものと人間的なものを結びつける ことができます。神の光栄のために 私たちの義務を果たす熱望を持ち、 それを妨げるような動機を正しなが ら、私たちの活動の中心に神を据え るよう努力すれば充分です。クリス マスを前にした日々に、マリアとヨ セフが当時のように、ベツレヘムの 家々を訪ね続けておられることを忘 れてはなりません。聖ホセマリアは 確信していました。「イエスは今も 私たちの心の中に休らぎの場を捜し 続けておられると申し上げても、信 仰の真理から離れることにはなりま せん。自己の盲目や忘恩を恥じて主 の赦しを願わなければなりません。 心の扉を今後決して閉じることのな いよう恩恵を乞わねばならないので す。| (同上19)

向こう数週間、教会は、「目を覚ま していなさい。いつの日、自分の主 が帰ってこられるのか、あなた方に は分からないからである | (マタイ 24,42) というイエスのみことばをこ だまさせ、警戒するようにと勧めま す。教皇様が全てのキリスト者に同 じことを思い起こさせてくださいま す。「ご降誕で私たちのもとに来ら れ、世の終わりに栄光の内に再臨さ れるイエスは、日々の出来事におい て飽きずに私たちを訪ね続けておら れます。そして、主の現存、主の来 臨を感知するため注意深くあるよう 私たちにお求めになります。また、 警戒してそれを待つようにと警告し ておられます。 (…) 宇宙を喜びで 満たした贖い主のご降誕の神秘を、 信仰をもって思い出すため、降誕祭 の準備をすることにしましょう。| (ベネディクト十六世、2007年12月 2日待降節第一主日説教)

先週、大変な状況を乗り越えた皆さ んの兄弟姉妹に付き添うため、パン プローナに数日滞在する機会を得ま した。この度も私は、創立者が私た ち皆に教え込まれた精神を、ナバラ 大学で働いている人たちにも見るこ とができました。テロ事件で辛酸を なめた数週間後でしたが、そこで 人々は本当にキリスト者らしく働い ていました。その心底キリスト教的 な態度に、神への感謝の念を駆り立 てられました。オプス・デイはまさ しく常に平和と喜びの種蒔きである ことを実感できたからです。

私の意向のための祈りを繰り返しお願いします。まず、教皇様と教会の統治における協力者の方々のため、そして、司教と司祭のため、全ての神の民のためです。さらに、一人ひとりが休むことなく個人的な使徒職に励むためです。キリストと共に、聖母と聖ヨセフに助けられて、全て

のことを全ての人のためにしましょ う。

今月はオプス・デイの記念日の多い 月ですが、きりがありませんので表明したの取り上げて考察おしたのできません。皆さんにいったは、この「神のようにないしみの歴史」をもったが私たち出まるです。単なる思い出とです。単なる思い出とです。単なる思い出とではなったがらではなったれを生きるようにはなった。

心からの愛を込めて祝福を送りま す。

皆さんのパドレ

†ハビエル

ローマ、2008年12月1日

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/shuren-qu-chang-noshujian-2008nian-12yue/(2025/11/29)